

「本当に、この人は神の子だった」 2014年4月12日

『週刊金曜日』に、辺見庸氏と佐高信氏の対談が掲載されている。辺見氏の現代を見る視点は「人間はここまで貶められ、見捨てられ、軽蔑すべき存在でなければならないのか」という言葉に集約されている。佐高氏は「現実には組織が個人を弱めてしまっている」と語っている。巨大な組織にからめ捕られ、個人が抹殺されている状況から、いかに「個」が復権できるかと、二人の対談は問いかけている。

私は、辺見氏の視点と言葉から多くを示されてきた。最初の感動は『反逆する風景』（講談社）の下記の記述である。ソマリアで14歳のファルヒアという少女に出会う。難民として逃れ、餓死寸前であった。食べようとする意欲もなく、まつげを這う蠅を追うまばたきもしない。その彼女を、辺見氏は下記のように書いている。「しかし、美しい。観世音菩薩のように美しいと私は思った。彼女は、この世のありとあらゆる苦しみを、他人の分まですべて一身に負うた目をしたまま、死に呼びこまれつつあった。それは大慈大悲で苦海の衆生を救済する、どこまでも澄んだ聖なる目である」。(中略)「その時、なぜだろう、ここに世界の中心があると確信した。飢えの末に、一片のニュースにもならず、出自も14年の道程も、世界の誰にも知られることなく、墓も墓標もなく死のうとしていたファルヒア。ただ飢えの末に死ぬるためだけに存在しているファルヒア。そう、ただ飢えの末に死ぬるためだけに生きてきた、この娘こそ世界の密やかな中心でなければならないと私は信じ、私を見ることをあくまで拒否するファルヒアに向かって合掌したのだった」。

主イエスは、エルサレム神殿当局から、神への「冒瀆罪」と判決された。「冒瀆罪」が、ローマに弓を引く「政治犯」として、総督ピラトに訴えられ、裁判を受ける。民衆も無力な主イエスを「十字架につけよ」と声を合わせる。ピラトは、神殿当局と民衆に押され、十字架刑を宣告する。この処刑のすべてに責任を負わされた百人隊長は、十字架上で、苦悩の大声をあげて息を引き取るまで、主イエスを見続けてきた。十字架の死を見届けた彼は「本当に、この人は神の子だった」と告白する。

辺見氏が、ファルヒアに観世音菩薩を見て合掌したのは、百人隊長の経験と同質であろう。キリスト教は主イエスの十字架の死に、人を生かす世界の中心があると信じる信仰である。この信仰が「個」を立てる。